# 琉球諸島出土キセルの基礎的研究
## ～琉球喫煙文化の研究～

石　井　龍　太

**要旨**　アジア諸地域の遺跡からはしばしばキセルが出土する。琉球諸島も例外ではなく、多くの遺跡から多くのキセル資料が出土している。そして同地域に特徴的なキセルが多く存在することが知られている。

本稿では琉球諸島の喫煙文化を物質資料から追究するための基礎的作業として、これまでに琉球諸島の諸遺跡から出土したキセル資料を概観、分類する。さらに文献史料に見られるキセル記述とも合わせて考察する。

## １．はじめに

ヨーロッパ人がアメリカ大陸に到達し、当地の喫煙習俗を目にしてからわずか100年後には、地球の裏側に当たる東アジアの人々は喫煙に親しんでいたといわれる。喫煙は短期間の内に広域に普及した上、社会に強く根差し、現代社会においても影響を持った習俗である。

一方で、過去の喫煙のあり方について知るための手掛かりは限られている。植物であるタバコ自体は腐食しやすく、そもそも喫煙行為によって煙となり消滅しまう。また喫煙習俗の詳細を記した文字資料も豊富とはいえない。そこで喫煙に関する様々な道具、喫煙具は、過去の喫煙のあり方について知るための貴重な手掛かりになると期待される。

本稿では琉球諸島から出土するキセルを取り上げて論じる。キセルは喫煙具の中でもとりわけ資料点数が多い。さらに分布域が広く、周辺諸地域にも多く見られるため、広域な地域間の比較研究に有効だと期待される。筆者は既に東南アジアの喫煙具について報告したことがある（石井2009a）が、その検討を通じて周辺諸地域の喫煙文化との比較研究、さらに喫煙の伝播・拡散について追究することも可能になると期待される。

琉球諸島における近世以降の遺跡の発掘調査が普遍的に行われるようになった現在、キセルはありふれた出土資料となったが、その分類を含め改めて検討する必要があると考える。また考古資料だけでなく、絵図資料、文献史料にもキセルに関するものが確認される。本稿では可能な限り幅広い資料を扱うことにする。

## ２．先行研究

近世以降の遺跡からはしばしばキセルが出土する。琉球諸島も同様であり、多くの遺跡からキセ

ルが出土している。日本列島の遺跡から出土するキセルの大半は、分離型･金属製のキセルである。しかし琉球諸島の遺跡から出土するキセルは、素材（窯業製品の場合は胎土・焼成）・形態共に多様であり、その理解において特徴の整理と分類は重要なものとなる。

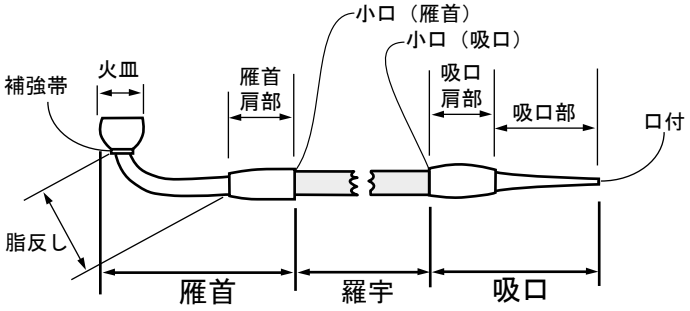
キセルを出土した遺跡の報告書では、これまでに様々な分類基準が提示されてきた。その基準は素材を主体とするものと、形態を主体とするものとに大きく二分される。琉球諸島のキセルに関する初めての体系的分類は、古我地原内古墓の発掘調査報告書で示された（沖縄県教育庁文化課 1987:70）。出土したキセルを素材に基づいて「石製」「陶製」「青銅製」に三分類し、さらに素材ごとの形態に基づいて「柱状形」「釣鐘形」「パイプ形」に細分している。ここで設定された素材に基づく三つの分類名称、形態に基づく三つの細分名称は、現在に至るも使用されている。

一方､形態を主体とした分類案も提示されている。安仁屋トゥンヤマ遺跡出土キセルの分析では、まず形態から①柱状形、②パイプ形に二分し、さらに素材から細分する手法を採っている（沖縄県教育庁文化課 1992:116-117）。那崎原遺跡や首里城跡出土キセルの分類でも同様の手法が採られている（那覇市教育委員会 1996:71-72、沖縄県立埋蔵文化財センター 2004c:102-103、沖縄県立埋蔵文化財センター 2005a:109-110）。

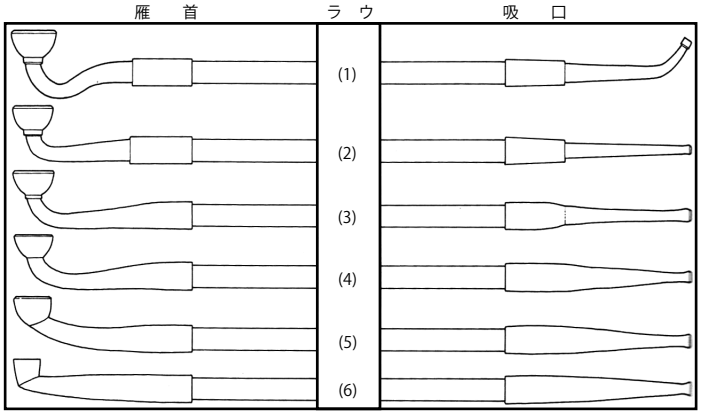
現在の分類においては、前者の素材を主体とした分類が支配的である（例えば島 2010:78-89）。また素材と形態に一定の組み合わせが認められることから、何れの要素を主体としても分類の結果自体に大きな差が生じるわけではない。素材と形態という二つの要素は一見すると等価であるように認識される。しかし分類基準が単に属性の無作為な抽出によるものではなく、キセルを理解する枠組みとなる目的意識を持った分類となるためには、分類基準について再考する必要がある。

キセルの分析において重要な目的となるのは、キセルの持つどの特徴に製作者・使用者の主たる意図があるのか、を見出すことにあるといえよう。素材と形態、何れの要素がキセルに関わる人々の関心事であったのだろうか。素材を主な､形態を補完的な基準とした分類に看取される問題点は、素材を越えて同じ形態のキセルが存在することにある。削り出しと研磨によって製作される石質のキセルと瓦質のキセルの中には、同様の筒形の形態を呈する資料が多く知られている。またこれらの素材となる石には砂岩、転用品には瓦質製品の破片が用いられるが、両者は軟質で加工し易く、かつ琉球諸島内で獲得し易いという、極めて近い性質を持つことも指摘できる。この二種の素材の違いは、キセルの使用者の厳密な使い分けとは考えにくく、むしろ特有の形態を呈するキセルの製作に便利な素材を求めた結果として、石や瓦質製品が選択されたと考える方が自然だといえよう。この二種の素材は、筒形キセルの材料として見た時に等価なものとして認識されていたと考えられる｡なお筒形キセルには粘土を整形し焼成した窯業製品も確認されることから､素材上の制約によってこうした簡素な形態となったわけではなく、こうした形態を意図して製作されていたことも明らかである。

また形態と素材の組み合わせも重要である。パイプ形・無釉陶器製のキセルは多様な形態を呈するものの、脂反しがなく細長い肩部を持つという共通性を持つ。しかしこうした形態は他の素材の




1




2

図１　部分名称と分離型・金属製キセルの分類

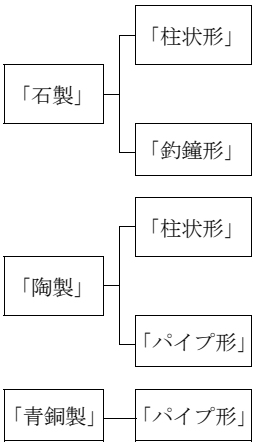



表１　これまでの分類

キセルには認められない。パイプ形・施釉陶器製キセルやパイプ形・金属製キセルも同様である。琉球諸島においては、素材を越えた形態が確認される一方で、両者の組み合わせは概ね固定的であり、特定の素材から特定の形態が作られる傾向がある点もまた見逃せない。

琉球諸島のキセルは、その製作に当たって特定の形態が存在し、それぞれの製作に適した素材が選択されていたと考えられる。従ってその分類基準は形態が主、素材が従となるべきである。そして形態と素材とはある程度決まった組み合わせを持つことから、両要素の組み合わせを分類の枠組みとする手法が適切だと考える。

またこれまでの分類には用語の問題も指摘される。その実態は瓦質製品の転用でありながら、素材の名称として「陶製」あるいは「瓦質」とする用語が用いられてきた。これは必ずしも誤った表記とはいえないものの、あたかも窯業製品であるかのような誤解も与え得る用語である。本稿ではこうした用語についても再考し、再設定を試みることとする。

## ３．沖縄諸島出土資料の分析

上述の通り、本稿では形態を分類の第一基準とし、素材を細分基準として分類を試みる。なお細かな部分に関する分析を行なうため部分名称を設定する（図 1-1）。

また琉球諸島は大きく北の沖縄諸島、南の先島諸島に二分され、先島諸島はさらに北の宮古諸島、南の八重山諸島に二分される。本稿では沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島の三地域に分け、キセル資料を概観・分類していく。

### ①筒状キセル

火皿のみが硬質素材で作成されており、側面に穿たれた穴に羅宇を差し込んで使用したと考えられる。砂岩や瓦質製品の破片を削り研磨して製作している。形態は大きく二種類が確認される。また素材は複数種類確認される。

#### 柱状形

火皿のみで、横断面が概ね円形を呈し、両側縁が直線的な形状（図 2-1 ～ 3）を柱状形とする。素材は石や窯業製品の破片が用いられる。石は砂岩が多く用いられる。窯業製品は厚手の瓦質製品の破片が用いられる。無釉陶器、施釉陶器を用いた例は今のところ報告されていない。瓦質の素材は陶器と異なり厚手でも軟質であり、砂岩と近い性質を持つことから加工する素材として適切だったと推察される。なお稀に柱状に整形した土製の窯業製品も確認される。

また粗製のもの、精製のものが認められる。首里城跡木曳門跡地区では穿孔のみがなされた荒い整形の石製キセルが出土している（図 2-3）。火皿周辺が黒色化していることから、未製品でなく実際に使われていたキセルだということが分かる。こうした粗製のキセルは、実際に製作してみると 20 分程度で仕上がるという（島袋 1990:113）。一見粗雑な製品で庶民のものという印象があるが、

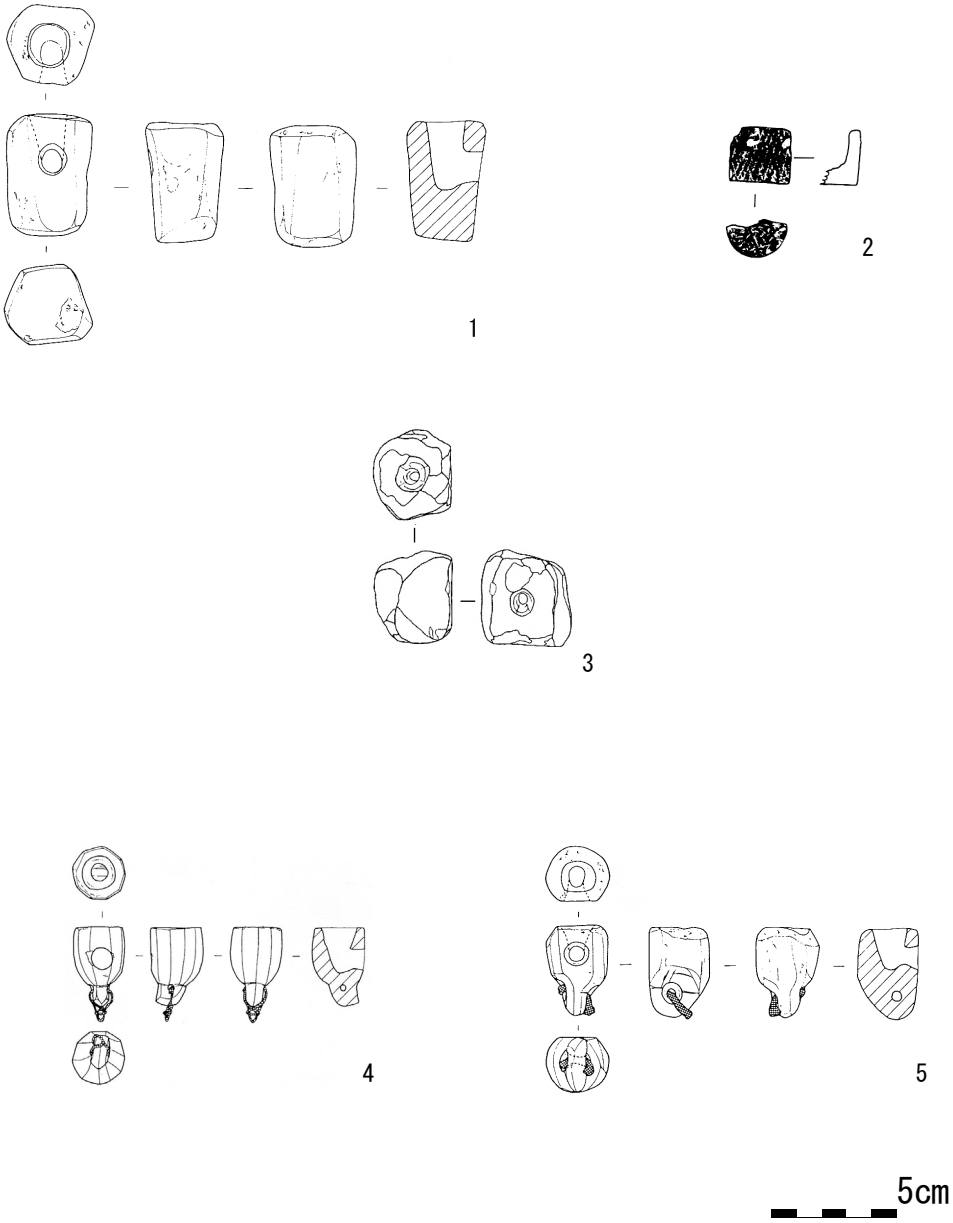



図２　筒形キセル

首里城跡、今帰仁城跡といった遺跡からもこうしたキセルは出土しており、一概に低級品とし難い。一方で、細かく丁寧な整形が施されたものも確認される（図 2-2）。

また未製品と考えられる資料も出土しており、製作工程を復元することも可能である。詳細は宮古島のキセルの項で後述する。

**釣鐘形**

火皿のみで、火皿から底部に向け曲線的に窄まる形状（図 2-4,5）を釣鐘形とする。底面には半円状の凸部を作り出し、さらに横方向に穿孔している。こうした底部の孔には時折紐を通した資料が確認され（図 2-4,5）、何らかの吊下げを意図して設けられたと推察される。

釣鐘形にも精粗の差はあり、中には特に手間をかけた精巧なもの（図 2-4）が見られる。

**③パイプ形・無釉陶器製**

火皿と肩部が作出されたキセルを、本稿では「パイプ形」と呼称する。琉球諸島のキセルの中で、パイプ形・陶製のキセルは最も出土量が多い。また地域毎に多様であることが知られている。

パイプ形のうち無釉陶器製のキセルは、脂反しがなく筒状の肩部を持つ点で共通する。また微細に見ると多様な形態を呈し、胎土・焼成の差異も認められる。

**パイプ形Ａ・無釉陶器製**

火皿と肩部の表面に幅広い面取りが施されるものを「パイプ形 A」とする（図 3-1 ～ 5）。規格性が高く、断面八角形を呈するものが主体となるが、稀に九、十角形のものも認められる。脂反しはなく、直線的な肩部と火皿が連結している。全体の長さは 3 ～ 4 ㎝、希に 5 ㎝近いものがある。肩部は火皿に向かって若干窄まり、一方火皿は口縁に向けハの字に開く。火皿を上から見たとき、肩部より火皿口縁の直径の方が幅広のものが一般的である。

胎土、焼成は陶製、無釉のものが主体となる。沖縄産無釉陶器「荒焼」と同じ胎土、焼成だと推察される。しばしば光沢や釉がかかるものも見られるが、釉は観察から灰釉だと考えられ、意図的な施釉ではなく窯内部で生じた自然釉だと推察される。

観察から製作技法を復元してみよう（図 3-5）。パイプ形 A・無釉陶器製キセルは、一般に肩部の穿孔と同一直線状に位置する火皿内面に凹みが見られる。また肩部と火皿を貫通する穿孔は火皿の穿孔を切っていることから、火皿を作出してから肩部と火皿とを貫通するという穿孔の順序は明らかである。火皿、肩部とも内面には軸を中心に胎土の粒子が移動したとみられる線条の痕跡が認められる。穿孔具を回転させて使用した痕跡だと推察される。

こうした痕跡の観察から復元されるパイプ形 A・無釉陶器製キセルの製作工程は以下の通りである（図 3-5）。

① 棒状工具に粘土を盛り付ける。

② 整形し、全体を面取り整形する。火皿と肩部の表面整形は別々にではなく、まとめて同時に行なう。また火皿内部には棒状工具が届かない状態にしておく。棒状工具が突き出している

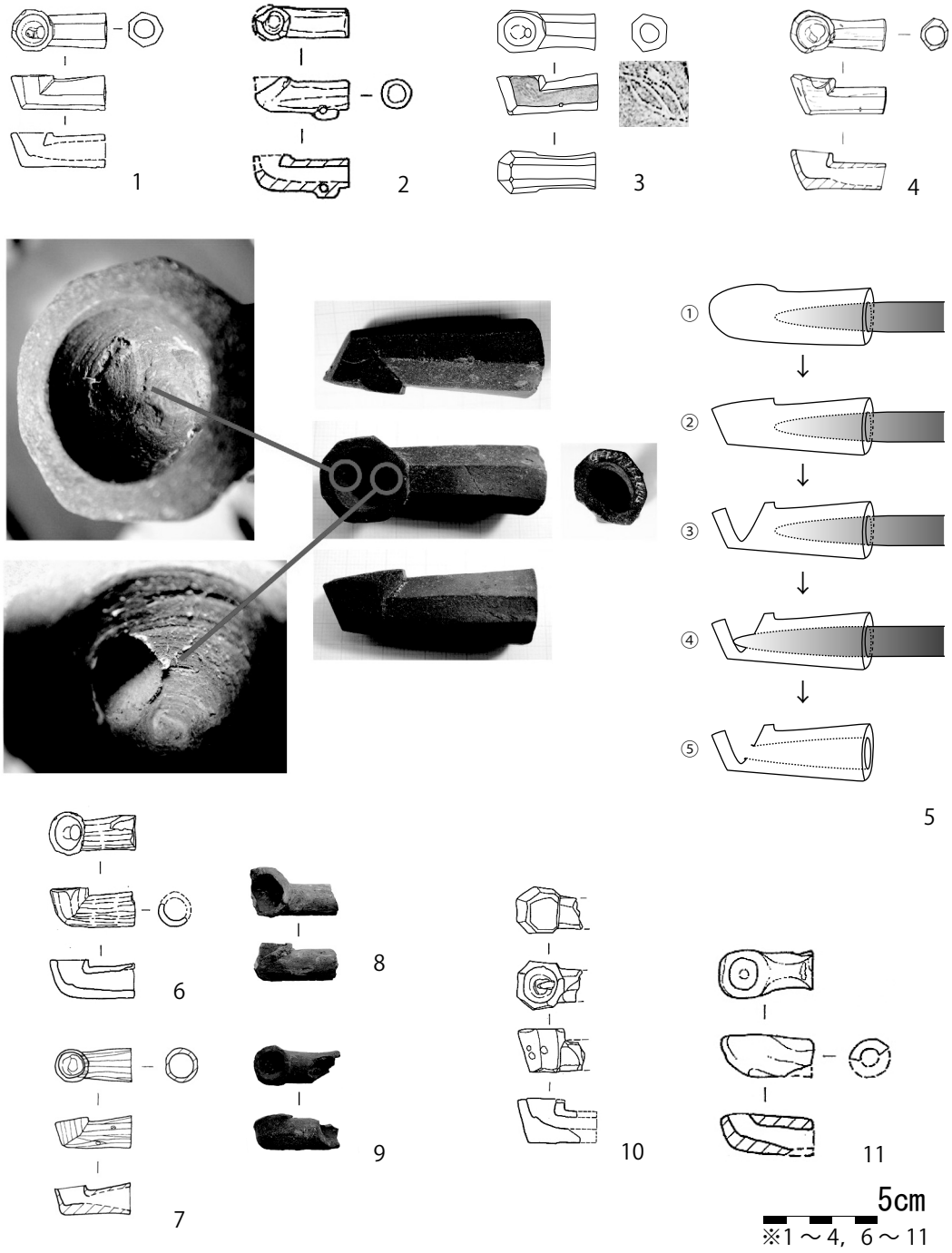



図 3　パイプ形・無釉陶器製

と火皿の穿孔の際邪魔になると推察される。

③　火皿を穿孔し整形する。

④　肩部を整形する芯に用いていた棒状工具を回転させながら押し込み、火皿内面と肩部内面を貫通させる。この際、押し込みすぎると火皿内面に工具の先端が接触し凹みができる。

⑤　棒状工具を引き抜く。

また肩部下側に小さな突起を設けて横方向に穿孔した、紐通しと推察されるものがつく資料が見られる。上述の製作過程の内では②の中で小突起が整形されると推察される。類例は少なく、生産遺跡では湧田古窯跡で 1 点、消費遺跡では渡地村跡（図 3-2）、綾門大道跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2003a:79）で出土が報告されるのみである。

なおさらなる細分の可能性も想定される。那覇市ナーチュー毛古墓から出土したパイプ形 A・無釉陶器製に分類される資料の中に、厚手で重みがあり、側面のナデと火皿側面のナデの間に稜が無く、火皿の角部に面取りを施した特異な資料が確認される（図 3-3）。形態、製作工程は大枠で一致するが、側面のナデや面取りといった製作の流儀に関する特徴は異なっており、生産集団を考える上で注目すべきといえよう。また左側面には紋様が陰刻され、窯印と推察される。今のところ同様の紋様を記した資料は確認されない。こうした資料はキセルの大量生産地と考えられる湧田古窯跡でも見られず、他の窯で生産された可能性を検討する必要がある。

**パイプ形Ｂ・無釉陶器製**

パイプ形のうち、肩部の表面に細かい線状の面取りが施され、断面がほとんど円形を呈するものを「パイプ形 B」とする（図 3-6,7）。火皿の表面は、肩部と同じく細かい線状の面取りが施されるもの（図 3-7）と、パイプ形 A と同じく幅広の面取りが施されるもの（図 3-6）とが確認される。全体の長さはパイプ形 A と同じく 3 ～ 4cm のものが多く、また肩部より火皿の方が幅広のものが一般的である点も共通する。火皿は口縁に向けハの字に開く。

パイプ形 B にもパイプ形 A と同様の整形痕跡が確認されることから、整形工程は同じだと推察される。胎土、焼成は陶製、無釉だが、パイプ形 A とは異なり赤色の胎土を呈するものが多い。

**パイプ形Ｃ・無釉陶器製**

湧田古窯跡地下駐車場地区からは、パイプ形・無釉陶器製に分類されるものの、面取り痕跡が明瞭でなく製作時の痕跡が全体に残る不整形なキセルが出土している（図 3-8,9）。胎土は他のキセルとは異なり、画一的ではないが白色粘土が混入する等特異であるといえる。

なお湧田古窯跡跡地下駐車場地区ではパイプ形 A・無釉陶器製キセルよりも下層から出土する傾向があり、より古く生産されていたと推察される。

**パイプ形Ｄ・無釉陶器製**

湧田古窯跡行政棟地区、地下駐車場地区からは火皿が下まで伸びて独立し、側面から肩部が伸びる形態のキセルが出土している（図 3-10）。同様の資料は沖縄本島の那覇市識名原遺跡（那覇市教育委員会 2001:27-28）、宮古島の住屋遺跡（図 7-7）から出土している。出土例、出土点数共に少ない。

### パイプ形Ｅ・無釉陶器製

面取りを施さず、火皿の底部が窄まり断面逆三角形を呈するキセルが出土している（図 3-11）。完形資料を見る限り肩部は短い。出土例は少なく、生産遺跡では湧田古窯跡、消費遺跡では渡地村跡から出土が報告されている。

### ④パイプ形・施釉陶器製

パイプ形・施釉陶器製の資料は古我地原内古墓からは出土しておらず、報告書での初出は『城間古墓群』（浦添市教育委員会 1990:26、51）だが、形態上の分類について詳述されることは無かった。『阿波根古島遺跡』では「パイプ型」と記述される（沖縄県教育庁文化課 1990:112）。なお生産地については那覇市壺屋古窯跡が想定されているが、一部については中国製とする見解も提示されている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2004a:154、沖縄県立埋蔵文化財センター 2010:324-329）。検証は今後の課題である。本稿では同一の形状を呈する資料をまとめて検討対象とする。

脂反しは無く、肩部と火皿が連結している。全体的に丸みを帯びる。火皿は直径が 1cm 前後と小型である。肩部は丸く膨らみ、火皿に向かって窄まる形態を呈する。肩部が大きく膨らみ小口に向かって窄まるものと、肩部はそれほど膨らまず窄まりが弱いものとが確認されるが、中間的な資料が多く客観性を欠くため、本稿では特に細分しない。

外面にはパイプ形・無釉陶器製キセルの様な工具による面取りは見られない。棒状の型に粘土を盛り付け、手で整形されるものと推察される。しばしば内面に工具を用いた直線的な整形痕跡が認められることから、小型のヘラ等を用いてえぐり整形したものと推察される。他のパイプ形キセルの整形とは大きく異なるといえよう。

胎土には白色の陶土を用いる。中には焼きの甘い赤色を呈するものも少数見られる。釉は主に透明、白、緑が確認される。赤色の胎土の場合は緑釉が施され、ある程度固定された組み合わせが確認される。ただこれが発色、焼成温度等の合理的な理由によるのか、或いは生産集団の流儀を意味するのか等、想定される多様な可能性は生産遺跡が確認されない現状では追究し難い。また彩色による紋様を伴うものもあり、その際には赤で連点や線を描くものが見られる。肩部のうち小口付近は表面が荒く、釉がかからない。焼成時にこの部分を下にし、離れ砂が付着するものと推察される。

また吸口を伴う。肩部が膨らみ、口付に向かって窄まり細く伸びる。こちらも雁首と同じく、肩部の膨らみや小口への窄まり方から細分できる可能性があるが、中間的な資料が多いため本稿では特に細分しない。また小口の表面は粗く釉がかからないことから、焼成時にこの部分を下にしたと推察される。

中には陰刻、彩色による紋様を持つものも見られる（図 4-5,10 ～ 12）。陰刻の場合、肩部に複数の刻みを伴うもの（図 4-5,10）や、印刻による紋様が施されるもの（図 4-11）もある。彩色の場合は連点や線（図 4-12）が描かれる。

パイプ形・施釉陶器製キセルは今のところ羅宇が残存した出土資料は見られず、また雁首と吸口

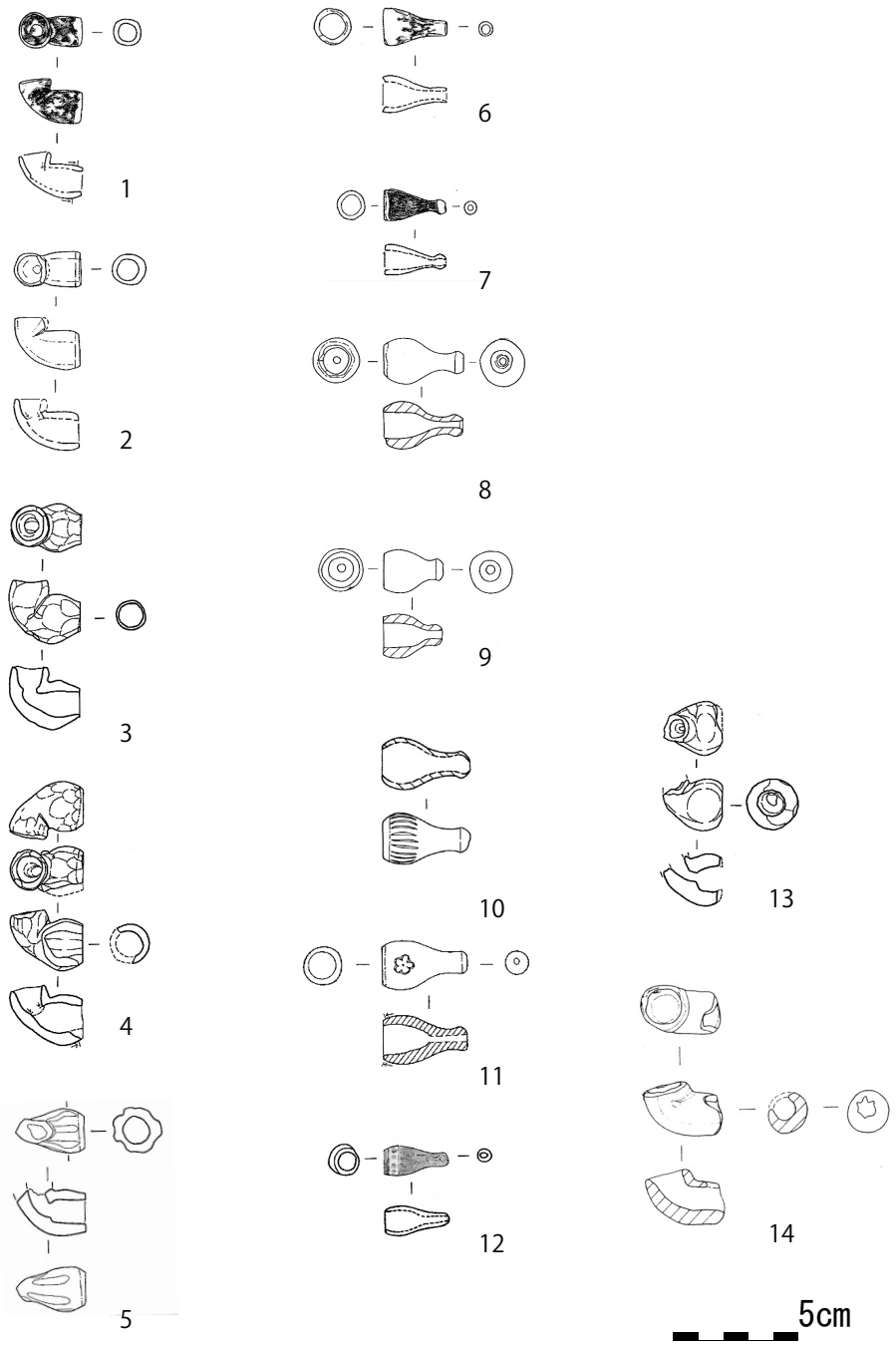



図 4　パイプ形・施釉陶器製

の組み合わせが判明した事例もないため、雁首と吸口それぞれの特徴がどのように組み合わさるのか、はっきりしたことは分からない。雁首と吸口とで釉の種類や紋様が近似したものは確認されるが、雁首と吸口の特徴が大きく異なる事例は中国、朝鮮半島といった東アジアのキセルに多く認められ、色・紋様が同じもの同士が必ずしも組み合うわけではないと考えられる。

### ⑤パイプ形・金属製

金属製は、雁首・吸口が別々に作られ、木製の羅宇と組み合わせて用いられる分離型と、雁首から吸口までひとつになった一体型に大別される。

#### 分離型

金属製、鍛造で、火皿と雁首は別に製作し接合している。湾曲した脂反しを持ち、肩部と火皿を繋げたものも確認される。雁首だけでなく吸口も見られる。雁首と吸口の肩部は何れも金属板を鍛造によって丸めて接合しており、接合部は左側面に来るものが大半を占める。中には火皿と脂反しの接合部や肩部の接合部に金属片を追加して補強されたものも確認される。

都内の遺跡からも多くのキセルが出土しており、形態に基づいた分類が行なわれている。古泉宏氏は一橋高校地点で出土したキセルの雁首を、大きく以下の 6 種に大別している（図 1-2）。

(1)　二本の管を接合し肩があり、脂反しが大きく湾曲して火皿にとりつき、火皿との接合部には細い銅板を巻きつけて補強したもの。河骨形。
(2)　(1) と同様だが、脂反しが下方へ湾曲しないもの。
(3)　(2) の製作技法を残しながら、火皿と首部の接合部に補強帯を巻いたもの 。
(4)　(3) と同様だが、補強帯の無いもの。
(5)　湾曲が小さくなり河骨型の形態からも脱皮したもの。
(6)　湾曲は全く消失し、火皿は極めて小型化し、その形も皿形や湾形というより、逆台形に近くなるもの。

（古泉 1983:118-121）

琉球諸島の分離型・金属製キセルには（3）（4）（5）（6）が確認されている。

吸口は肩部で膨らみ、細く長く伸びる形態が多い。接合痕は側面に見られる。その他には全長が短く肩部が膨らむ金属製の吸口も出土している。接合部が側面に見られる点は長い吸口と同様で、同じ製作工程を経たものと推察される。

また銘が確認される資料が見られる。「村田」銘のある雁首の資料が湧田古窯跡地下駐車場地区（図 5-6）、御細工所跡（那覇市教育委員会 1991:117-118）、銘刈古墓群（那覇市教育委員会 2005:80）から、「円山号」銘が確認される吸口がワラビンチャー古墓（長佐古 2010:140-143）から出土している。この内、「村田」は東京で製作された「村田張り煙管」に見られる銘である。具体的な流入ルートは判然としない。なお「村田」銘のあるキセルは鹿児島県出水麓遺跡でも出土している。

さらに雁首と吸口の組み合わせが判明する例もある。ナーチュー毛古墓群第 24 号墓の墓室内右

棚中央からの出土資料（図 5-1）は脂反しが湾曲し、火皿との接合部には補強帯が巻かれ、火皿は大きく丸く膨らむ。古泉氏の分類に従えば（3）に該当する資料だといえよう。吸口は直線的で、小口近くに淵に沿って沈線が一条巡る。また山川原古墓群の 10 号墓室の蔵骨器 No.1 からは、雁首と吸口が出土している（図 5-2）。脂反しは湾曲するが、火皿との接合部に補強帯は見られず、（4）に分類される。なお蔵骨器 No.1 には雍正二年（1724 年）と銘書きされていたことから、18 世紀前半の年代が与えられる。年代の判明するキセルは珍しく、貴重な出土事例であるといえる。首里城跡木曳門地区出土資料（図 5-5）は金属製の羅宇が残存した貴重な資料であり、雁首の形態から（6）に分類される。吸口は直線的である。

さて琉球諸島のキセルは分離型が大部分を占めることから、大量の羅宇が存在したはずである。金属製の羅宇を用いた例もある（図 5-5）が、その多くは植物質だったと推察され残存していない。ただ分離型･金属製キセルだけは残存率が高く、しばしば肩部の中に破損した状態で残されている。中には全形が伺える状態で出土した資料もある。古我地原内古墓群からは吸口を伴う完形の羅宇が出土している（図 5-7）。表面を全体的に削って整形している。雁首に差し込まれる部分は緩やかに窄まる形状を呈する。また両端ともすすけて黒色化している。吸口に差し込んだ部分が被熱により煤けるとは考えにくく、整形時に施された処理である可能性も検討する必要があるだろう。報告書によればリュウキュウチクを利用しているとされ、地元の材料を用いたものと考えられる。

**一体型**

雁首、羅宇、吸口が一体となった金属製キセルが確認されている（図 6）。琉球諸島では、今のところ金属製以外の一体型キセルは出土していない。

火皿は一様に小型で、古泉氏の分類では（6）に属するといえる。左側面あるいは上面に火皿から吸口まで伸びる接合痕が確認される。分離型の金属製キセルと同じ製作工程が伺える。形状は多様で細分も可能だが、一分類が一資料に留まるものが多く、複数種類あるというより多様だと考えるべきであろう。

肩部に装飾を施す例が希に見られる。恩納村沖縄科学技術大学院大学建設予定地内の遺跡では、細かな亀甲紋様が肩部に広く施された一体型キセルが出土している（図 6-3）。このキセルには銘も確認され、下面に「〇〇松金」（※〇は判読不能）と陰刻されている。この他、「明観堂」の銘が確認される資料がワラビンチャー古墓（長佐古 2010:140 ～ 143）から、「太田號」銘のある資料が古我地原古墓群（図 6-1）から出土している。この内、「太田號」は鹿児島県金峰町で製作された「阿多張り煙管」に見られる銘である。上述した分離型・金属製キセルの銘と合わせ、日本各地で生産されたパイプ形・金属製キセルが琉球諸島に持ち込まれていたことがわかる。

この他、首里城跡歓会門・久慶門地区からは「刀豆形キセル」と呼ばれる特異なキセルが出土している（図 6-4）。雁首から吸口までが一体となっており、全長 14.7cm という小型のキセルである。そして羅宇に当たる部分が扁平で縦に大きく膨らみ、断面楕円形を呈する。但し上下面は平坦である。また断面の観察から内部に木製の管が通っていたという。そして僅かに残るメッキから金の塗

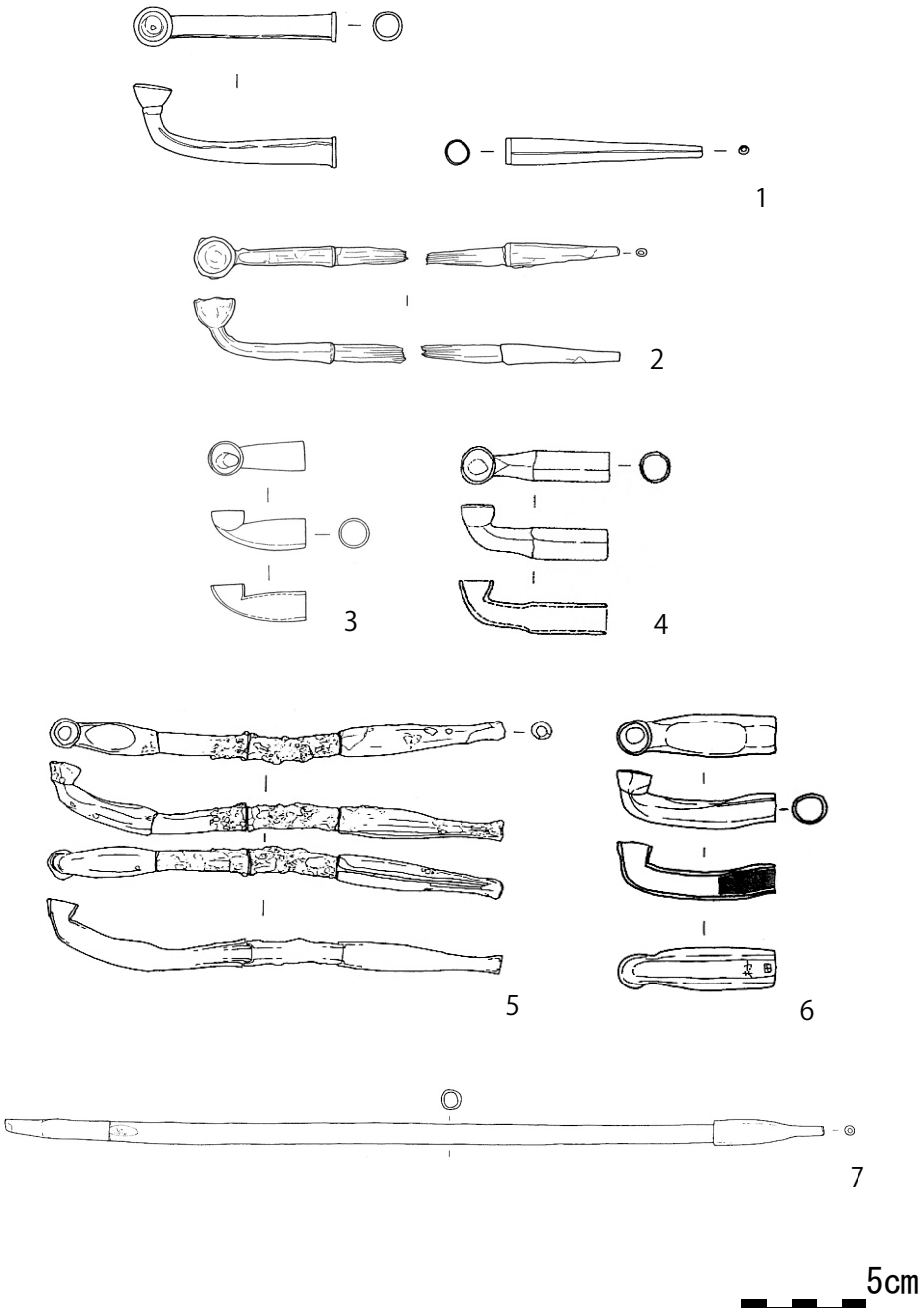



図５　パイプ形・金属製（分離型）

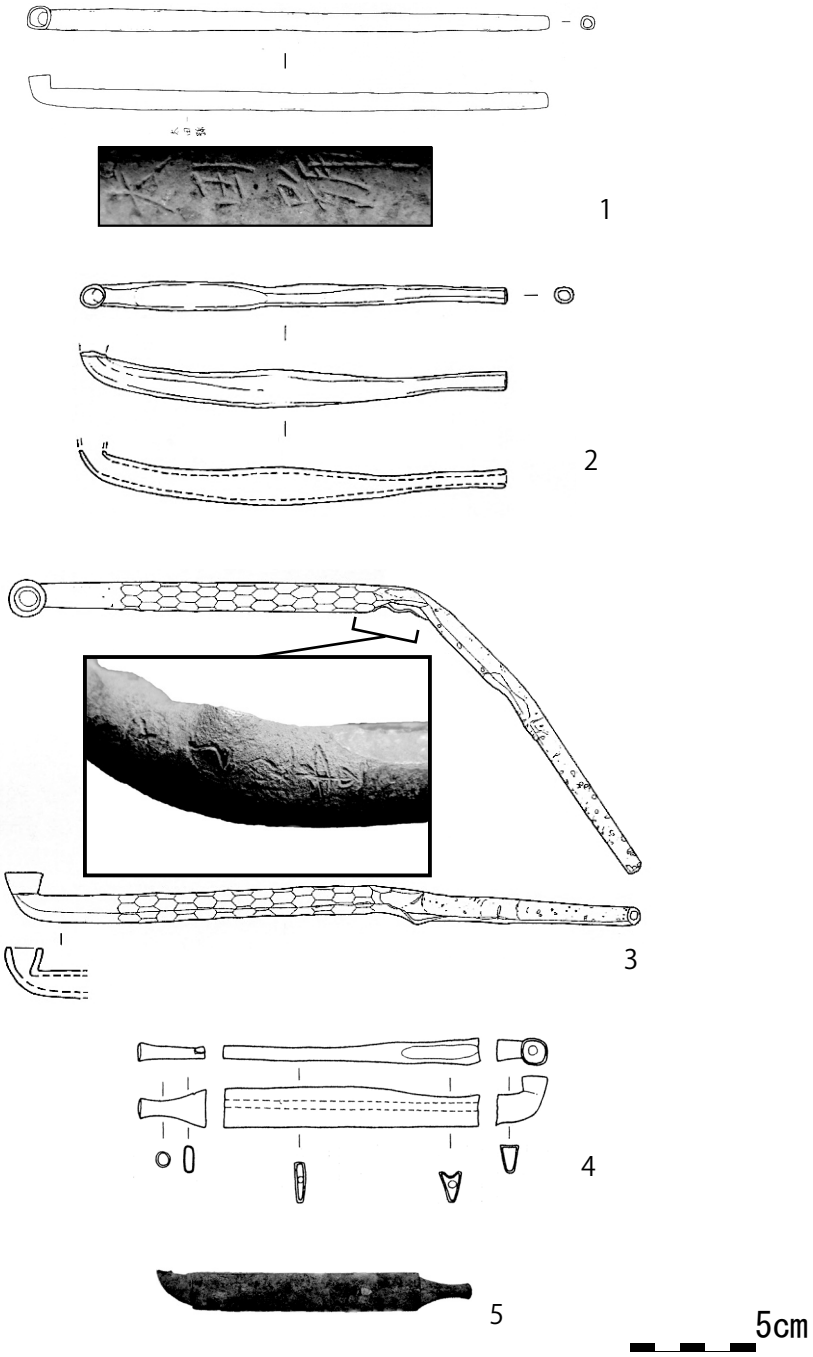



図６　パイプ形・金属製（一体型）

料がついていたものと見られるという。紋様については錆のため判然としない。また火皿近くの上面に大きな凹みが見られ、長期に渡り使用されたことで形成された火種落しの痕跡と推察される。類例は県内では那覇市ナーチュー毛古墓群第 32 号墓、宜野湾市嘉数トゥンヤマ遺跡（宜野湾市教育委員会 2008:93）から出土している。ナーチュー毛古墓群出土資料（図 6-5）はほぼ完形を呈する。残念ながら火皿は欠損しているが、破損部を見る限り小型の火皿がついていたものと推察される。全長は僅かに 12.8cm と首里城跡出土資料よりやや小さく、羅宇側面には沈線紋が施され、火皿寄りから中央にかけて草花紋が、吸口付近には斜め方向の直線からなる網目状の紋様が施される。なお首里城跡出土資料に見るような凹みが全く見られないことから、未使用の状態で副葬されたと推察される。嘉数トゥンヤマ遺跡の資料は吸口部の破片である。

### ⑥その他

上述のキセルとは異なる特徴を有するものの、類例に乏しく、一つの類型と認め得るかどうか検討すべき資料が出土している。ここではまとめて一項内で扱う。

石製だが、上述の資料群とは明らかに異なるパイプ形キセルが湧田古窯跡行政棟地区から出土している（図 4-13）。残念ながら撹乱からの出土であり、年代や共伴資料は判然としない。火皿を欠損しているが、全体の形態を推察することは可能である。脂反しは無く、肩部と火皿が連結している。肩部が大きく膨らみ、火皿に向かって急角度に窄まる。内面の穿孔は二段になっており、肩部内面は広いが、火皿内面近くで段があり、細くなる。形態は上述のパイプ形・施釉陶器製キセルと類似するが、石製である。色調は半透明で黄色味がかる。報告書では中国の浙江省や福建省などを産地とする蠟石を素材とするとされる（沖縄県教育委員会文化課 1999:80-81）。

久米島ヤッチのガマから、石製だが筒形でないキセル資料が出土している（図 4-14）。火皿と肩部のみからなり、肩部は直線的であり、火皿の幅と肩部の幅はほぼ等しい。形態は上述のパイプ形・施釉陶器製キセルと類似するが、パイプ形・施釉陶器製キセルに見られる膨らみを持つという特徴は火皿、肩部共に見られない。

## ４．宮古諸島出土キセル

琉球諸島のキセルには地域差があることが確認されている。沖縄諸島に次いで、宮古諸島から出土したキセル資料を検討してみよう。なお宮古諸島においてキセルの出土が報告されているのは宮古島のみである。

### ①筒形キセル

宮古島では、柱状形キセルが出土している。また他の地域には見られない特異な資料も出土している。

中央でくびれ上半が丸く膨らむ特徴的な形態の資料（図 7-3 ～ 5）は、今のところ沖縄諸島、八重山諸島では見られない。くびれ部に突帯を作出するもの（図 7-3）もある。中には刻線による斜線を主体とした細かな紋様が下半側面全体に施される資料（図 7-5）もある。裏面には刻線による特異な紋様が見られ、何らかの記号である可能性もある。素材、形態を問わずこれほど細かな紋様の施された資料は見られない。特異な形態とあわせ極めて装飾的なキセルだといえよう。沖縄本島でも、同様の細かな紋様を側面に施したキセルが今帰仁村の今帰仁城跡周辺遺跡で一点出土している（図 2-2）が、住屋遺跡の資料の様な特異な形態ではなく直立した柱状形を呈する。

この他、中央でくびれ底面に向かって直線的に広がる石製の資料が住屋遺跡から（図 7-4）、形状は柱状形だが底面に沿って一条の刻線を巡らす石製の資料が砂川元島遺跡（図 7-1）や住屋遺跡（平良市教育委員会・社会教育課 1999:190）から出土している。こうした高い装飾性は宮古島の柱状形キセルの特徴といえよう。沖縄本島で見られる穿孔のみがなされた荒い整形の柱状形キセル（図 2-3）は今のところ報告されていない。

宮古島住屋遺跡出土の石製キセルには、底面と側面に穿孔されるものの貫通し切らない未完成の紐通しが見られる資料が多くある（図 7-2）。使用者が必要に応じて穿孔して仕上げるのだろうか。周辺諸島では今のところ見られず、これも宮古島のキセルにおける特徴といえよう。

さて宮古島の住屋遺跡から、柱状形キセルの製作工程を考える上で重要な、未製品と考えられる資料が出土している（図 8-1）。横断面はほぼ正方形を呈し、角は丸い。全面に細かな擦痕が見られることから丁寧な研磨調整が行われたことがわかる。全体の整形は完成しているにもかかわらず、どこにも穿孔が見られず、また上半を欠損している。製作途中に何らかの要因で半分に折れ、加工を中断した未製品だと考えられる。穿孔の前に全体の整形を完了するという製作工程の順序が分かる資料だといえよう。沖縄本島でも同様の形態を示す資料が見られ、浦添城跡（図 8-2）、今帰仁城跡（図 8-3）、首里城跡鎖之間北側地区（図 8-4）、首里城跡御内原地区（図 8-5,6）で出土している。何れも穿孔されておらず、表面は丁寧に磨かれている。

さらに整形が進んだ資料が、浦添城跡から出土している（図 8-7）。筒形に整形されており、上面に穿孔が施される。火皿の深さとしてはやや浅く、口径も小さい。火皿を作出しようとして穿孔を始めたものの、何らかの理由で作業を中断したのであろう。

首里城跡から出土した資料（図 8-8）は、細長く片端はすぼまることから、釣鐘形の未製品である可能性がある。表面は灰色を呈するが内面は黒色であり、瓦質製品を加工した転用品だと判断される。この資料は上面にのみ浅い穿孔が確認される。上面から側面にかけ一部が大きくはじけており、穿孔途中に破損したために放棄されたものと推察される。

宮古島住屋遺跡で出土した資料（図 8-9）は、断面は円形を呈し、全面に細かな擦痕が見られ、丁寧な研磨調整が行われたことがわかる。側面には直径 1cm 弱の孔が空けられ、中心付近まで深く穿孔されている。上面には浅い穿孔の痕跡が見られ、上面向かって右側が大きくはじけている。火皿を作出するために上面に穿孔する途中で石が割れ、製作を放棄した未製品だと考えられる。底

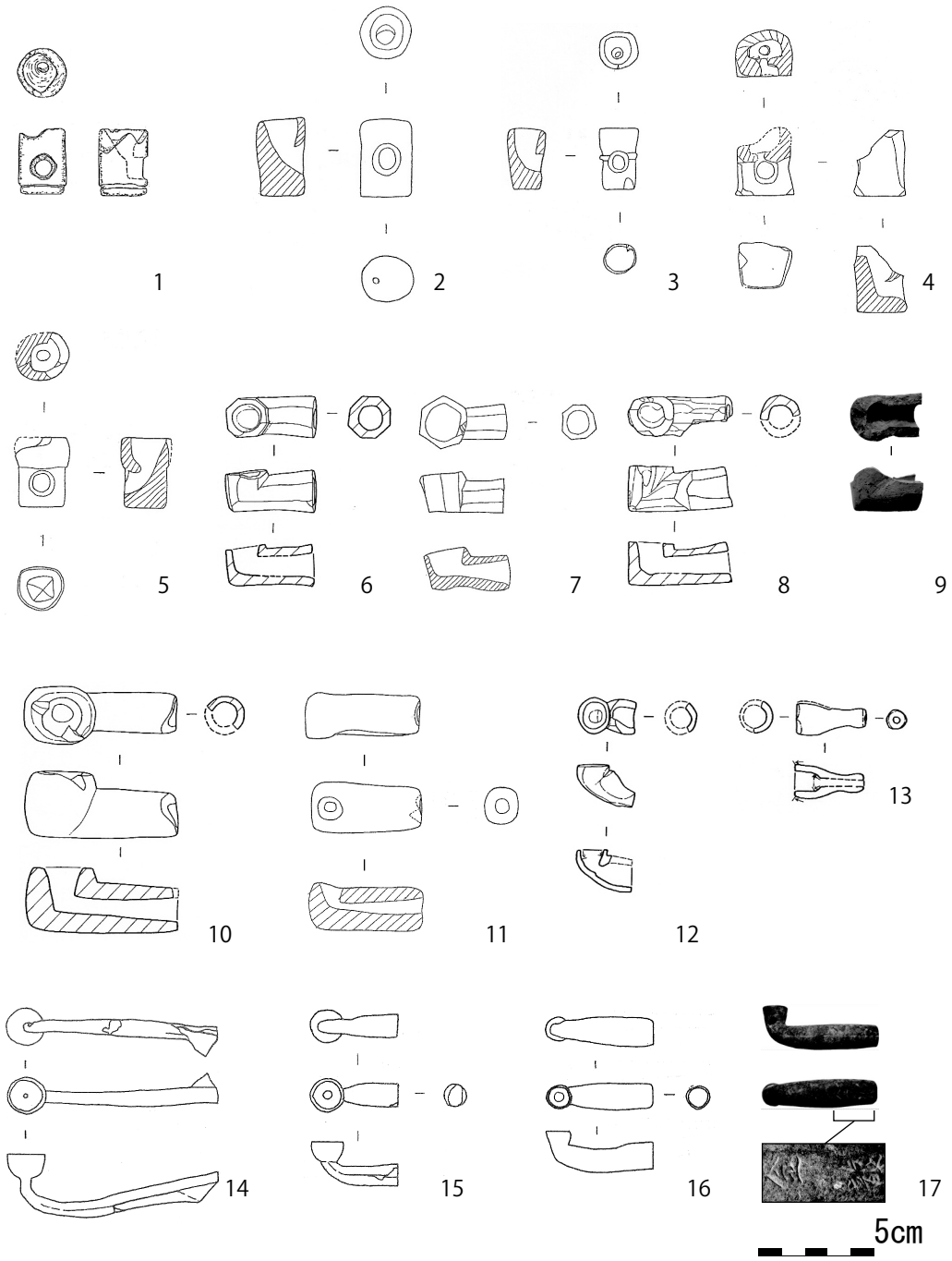



図７　宮古島出土キセル

面には紐通し孔は作出されていない。先の沖縄本島出土資料に見た順序とは異なり、側面⇒火皿の順に穿孔されたものと考えられる。

こうした未製品から推察される柱状形キセルの製作工程は以下の通りである。

①　素材を整形し、全面研磨して形状を整える。

②　側面・上面に穿孔し小口と火皿を設ける。

③　底面と側面に穿孔し、貫通させて紐通しを設ける。

整形の観察から、これまでに出土した筒形キセルは何れも上述の製作工程によって説明できると考えられる。穿孔の順序が地域差となるかどうかは資料不足のため断定を避けたい。

なお浦添城跡、湧田古窯跡行政棟地区からは、火皿と小口両方が穿孔されながら貫通されず、何らかの理由により中途で放棄された未製品が出土している（図 8-10）。火皿、小口とも穿孔が不充分であり、住屋遺跡出土資料（図 8-9）とは異なり、両方を徐々に深くしつつ貫通させる手法が採られたのであろう。

### ②パイプ形・無釉陶器製キセル

#### パイプ形Ａ・無釉陶器製

宮古島でもパイプ形 A・無釉陶器製、パイプ形 B・無釉陶器製キセルが出土している。沖縄本島で出土するものと同じ特徴を有する。

#### パイプ形Ａ′・無釉陶器製

一方で宮古島では沖縄諸島には見られないパイプ形・無釉陶器製キセルが出土している（図 7-6）。脂反しはなく、直線的な肩部と火皿が連結している。肩部と火皿の表面に幅広い面取りが施され、断面八角形を呈する。全体の長さは概ね 3 ～ 4cm、希に 5 ㎝近いものがある。火皿内面には肩部の穿孔と同一直線状に凹みが位置することから、先ず火皿を作出し次いで肩部を穿孔するという順序が確認される。また火皿、肩部の内面には線条の痕跡が認められる。前述した沖縄本島のパイプ形 A の整形工程と同じだと推察され、諸特徴とあわせ沖縄本島の「パイプ形 A・無釉陶器製」の範疇に入るものと考えられる。

しかし肩部と火皿の幅がほぼ同じであり、肩部は幅広のまま火皿に向かって直線的に伸び、火皿も口縁に向け同じ幅で直線的に伸びる。また沖縄本島の資料より厚手で、重たく大きい。色調は何れも赤褐色を呈し、沖縄本島の資料のようにアズキ色を呈するものは確認されない。胎土にはしばしば白色の粘土が混じり、暗赤色や暗灰色の粒状の混和物が見られる。光沢や自然釉は見られない。

沖縄本島のパイプ形 A との共通性と差異を評価して「パイプ形 A′」とする。新里東元島遺跡（図 7-6）、住屋遺跡（平良市教育委員会・社会教育課 1999:193）、尻並遺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2003b:84）で出土している。

#### パイプ形Ｄ・無釉陶器製

火皿が下まで伸び、側面から肩部が伸びる形態のキセルが住屋遺跡（図 7-7）から出土している。

図８　筒形キセルの未製品

類例は湧田古窯跡地下駐車場地区（図 3-10）等で出土している。出土例、出土点数共に少ないが、分布の範囲は島を越えて広く認められる。

**その他　パイプ形・無釉陶器製**

特徴的だが類例に乏しく、一つの類型と認め得るかどうか検討すべき資料が出土している。こうした資料をここでは「その他」としてまとめて扱う。「パイプ形 B」との共通性と差異を評価して「パイプ形 B′」としておく。

宮古島の新里東元島遺跡から 1 点のみ出土した資料である（図 7-8）。脂反しはなく、直線的な肩部と火皿が連結している。肩部の表面に細かい線状の面取りが施され、断面がほとんど円形を呈する。火皿の表面は肩部よりやや幅広の面取りが施される。色調は赤褐色を呈する。全長は 4.7cm を測る。以上の特徴から「パイプ形 B・無釉陶器製」の範疇に入るものと考えられる。しかし肩部と火皿の幅がほぼ同じである。肩部は幅広のまま火皿に向かって直線的に伸び、火皿も口縁に向け同じ幅で直線的に伸びる。混和材ははっきりしないが、表面には混和材が脱落した痕跡が多く見られる。光沢や自然釉は見られない。「パイプ形 B」との共通性と差異を評価して「パイプ形 B′」としておく。

宮古島の根間西里遺跡から出土した資料（図 7-9）は、観察される形態、製作技法は上述したパイプ形 B・無釉陶器製と同様ながら胎土に暗赤褐色の粒子が多く混入した資料が出土している。今のところ他の島では出土例がなく、宮古島で生産された可能性がある。

宮古島新里東元島遺跡から、大型の無釉陶器製キセル資料が出土している（図 7-10）。火皿側面から肩部が伸び、面取りは見られず表面は平滑である。肩部の断面形態は円形を呈し、火皿の断面形態は楕円形を呈する。色調は白褐色を呈し、重く大柄で、特に火皿は大きい。今のところ一例のみで、宮古島以外の周辺諸島では見られず、島内産の可能性が高いと考えられる。

宮古島住屋遺跡から、火皿を作出しない陶製の雁首資料が出土している（図 7-11）。表面、裏面は平坦で、細かい線状の面取りが施され、断面形態は概ね円形を呈する。火皿はなく、小さく穿孔されるのみである。同様のサイズ、形態のキセルは宮古島以外の周辺諸島では見られず、島内産の可能性が高いと考えられる。面取りなどの整形をほとんど施さず、指跡を多く残す荒いつくりのキセルは沖縄本島でも見られるが、形態は大きく異なる。

**③パイプ形・施釉陶器製**

宮古島でも住屋遺跡をはじめ出土例はあるものの、基本的に沖縄本島で出土するものと諸点で一致する（図 7-12,13）。持ち込みか自給かは判然としないが、今のところ宮古島で独自に製作されたと推察されるパイプ形・施釉陶器製キセルは確認されない。

**④パイプ形・金属製**

分離型・金属製キセルが住屋遺跡を始め多く出土している（図 7-14 ～ 17）。基本的には沖縄本

島で出土するものと諸点で一致する。また「金龍」銘のある雁首資料が宮古島の砂川元島遺跡から出土している（図 7-17）。珍しい例として宮古島の住屋遺跡から出土した分離型・金属製の雁首の中には、上面に位置する肩部の接合部の上にさらに帯状の金属片を添加して補強とした資料が見られる（平良市教育委員会・社会教育課 1999:197）。火皿は欠損しているため上述の分類のうち何れに該当するか不明である。類例は首里城跡上の毛地区及び周辺地区で出土している（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005a:110）。

宮古島の住屋遺跡では分離型・金属製の雁首が 9 点、パイプ形・施釉陶器製の雁首が 5 点出土しているが、吸口はどの種類も出土していない。吸口はなくとも雁首と羅宇だけで喫煙することは可能だが、宮古島内でもこの遺跡のみで確認される特異な出土状況だといえる。[1)]

なお宮古諸島では一体型・金属製キセルは管見の限り報告されていない。

### ⑤羅宇

新里東元島遺跡で出土した分離型・金属製の吸口の内部には外側に紙を巻きつけた木製の羅宇の一部が残存していた（沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b:146-147）。羅宇が細すぎ、羅宇を差し込む吸口の穴の径と羅宇の径を合わせる為の措置だろうか。今のところ他に類例が無いものの、注目される出土例だといえよう。

## ５．八重山諸島のキセル

沖縄諸島、宮古諸島に続き、八重山諸島から出土するキセル資料を検討してみよう。

### ①筒形キセル

西表島上村遺跡から柱状形キセルが出土している（図 9-1）。砂岩を素材に用いており、火皿上部を一部欠損している。全面に幅広の面取りが施されている。底部に紐通しの穿孔は確認されない。高さは 2.4cm しかなく、やや小型だといえよう。類例は沖縄本島のナカンダカリヤマの古墓群第 14 号墓前庭から出土している（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005c:87）。

この他、西表島慶来慶田城遺跡では柱状形と推察されるキセルが 1 点出土している（沖縄県教育委員会文化課 1997:93）。破片資料で、底部から若干開き気味に立ち上がる形態を呈する。

### ②パイプ形・無釉陶器製

#### パイプ形Ａ・無釉陶器製、パイプ形Ｂ・無釉陶器製

パイプ形 A・無釉陶器製、パイプ形 B・無釉陶器製は、八重山諸島各地で確認される。諸特徴は沖縄本島で出土する資料と一致する。

#### パイプ形Ｂ′・無釉陶器製

与那国島嘉田地区古墓群にて 16 号墓から 2 例（図 9-2）の出土が確認されている。上述の通り、類例は宮古島で出土している。

**その他　パイプ形・無釉陶器製**

石垣島には同地域に分布が限られる特異なキセルが出土している。但しその多くは類例に乏しく、一つの類型と認め得るかどうか検討の余地を残している。ここではまとめて一項内で扱う。

野底遺跡から出土した資料（図 9-3）は、肩部・火皿共に幅広の面取りを施し、火皿は口縁に向けハの字に開く。肩部の約半分と火皿の一部を欠損しているため全形を伺うことはできないが、確認される諸特徴はパイプ形 A・無釉陶器製に類する。しかし胎土は焼の甘い赤色を呈し、白色の鉱物片が大量に混ざる。また肩部の孔は細い。火皿が黒く煤けており、使用されたことが分かる。

野底遺跡からはもう一点、特徴的な資料が出土している（図 9-4）。肩部の幅は変わらないまま火皿に繋がるものの、火皿は口縁に向けハの字に開く。肩部には細かな線状の面取りが施される。以上の特徴はパイプ形 B に類するものの、褐色を呈し、また肩部の面取りは規格的とはし難い乱雑なものである。

この他、黒石川窯址からは特徴的なキセルが出土している（図 9-5）。脂反しはなく、直線的な肩部と火皿が連結している。肩部の表面に細かい線状の面取りが施され、断面がほとんど円形を呈する。火皿の表面にも肩部と同じく細かい線状の面取りが施される。以上の特徴は沖縄本島のパイプ形 B・無釉陶器製と共通する。しかし全体的に大型で、全長は 4.2cm だが火皿の径は 2.1cm、肩部の幅は 1.9cm を計る。色調は表面が灰色、内面が赤色を呈する。整形工程はパイプ形 A・無釉陶器製と同様と考えられる。

なお上述の通り、野底遺跡を始めとする石垣島の遺跡ではパイプ形 A・無釉陶器製キセルが出土しており、石垣島に特有のキセルより数が多い。また宮古島では規格化されたパイプ形 A′・無釉陶器製のキセルが各地で出土していたが、八重山諸島の遺跡では上述した何れのキセルも今のところ出土例は一例だけである。

**③パイプ形・施釉陶器製**

八重山諸島でもパイプ形・施釉陶器製キセルの出土例はある（図 9-6 ～ 9）。その大半は沖縄本島で出土するものと諸点で一致する。但し持ち込みか自給かは判然としない。

一方、特徴的なキセルも確認されている。野底遺跡で出土した施釉の吸口資料（図 9-9）は、吸口部は欠損しているものの全形を推察することは可能である。肩部の最大径は 2.4cm を測り、かなり大型である。厚手で、肩部の厚みは 0.7cm を計る。肩部の小口寄りに菱形紋様が四つ印刻される。透明釉がかかる。大きさからして同じ遺跡から出土している雁首と対になるとは考えにくく、八重山諸島にはさらに大型の雁首も存在している可能性があるが、今のところ出土例は見られない。

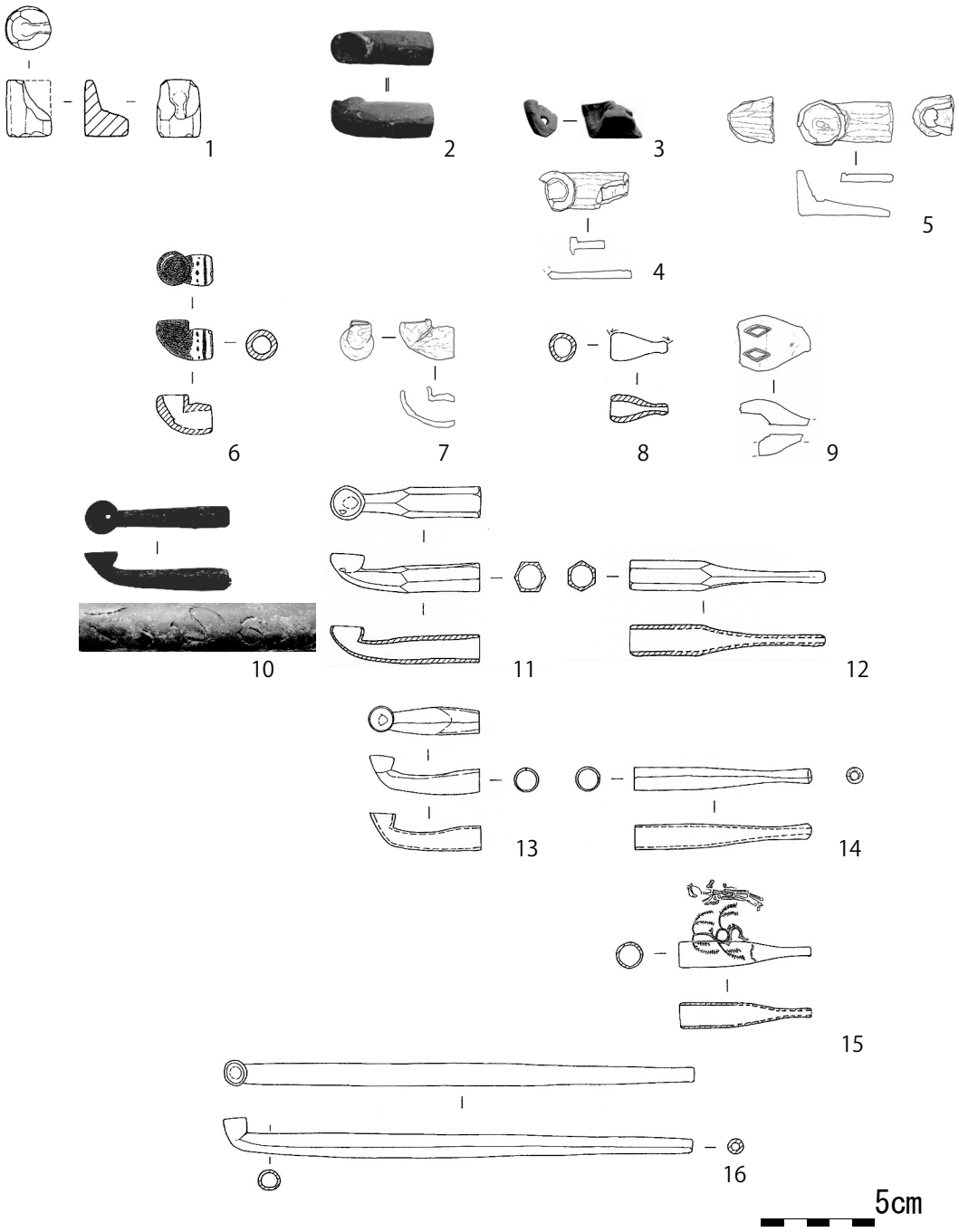



図９　八重山諸島出土キセル

④パイプ形・金属製

分離型

八重山諸島各地の遺跡から多く出土している（図 9-10 ～ 15）。基本的には沖縄本島、宮古諸島で出土するものと諸点で一致する。雁首は（5）（図 9-10,11）、（6）（図 9-13）のみ確認される。また吸口もよく出土している。

中には銘の入った資料が見られ、「ひらのや」銘のある雁首資料が与那国島の嘉田地区古墓群から出土している（図 9-10）。

一体型

今のところ嘉田地区古墓群から一点が出土したのみである（図 9-16）。

## ６．文献資料の分析

出土資料だけでなく、文献史料にもキセルに関する言及は見られる。出土資料と合わせて取り上げることとする。

①琉球諸島における最古のキセル記述

同時代史料の中で、琉球諸島の喫煙に関する最古の記録は、袋中上人の『琉球往来』（1602 年）に見られるタバコの記載である。

烟草事

右出自南蠻國。賓客供応之興也。劑用細。烟筒専掃除。或爲毒。或爲藥。人有寒暑。禁好可依氣。本草不見。好惡難定。唯一座一薫而。爲談笑具者也

宗波先生收

漳州生

（良定、横山重 1936:144）

タバコは南蛮国を原産とするという。伝来ルートについては言及されておらず、南蛮国とあるのみで中継地として日本、中国といった特定の地域が取り上げられていない点も注目すべきだといえよう。また賓客の供応に用い、談笑具としている点は注目される。

そして「烟筒」とあり、キセルを指していると推察される。「劑用細」すなわち細く刻んで火皿に詰めて吸うのだろう。残念ながらキセルの素材や形態に関する記述はない。

鈴木達也氏によれば、これは日本列島も含めたキセルに関する最古の記録であり、タバコに関する確実な記載としても初期のものであるという（鈴木達也 1999:70、80）。但し鈴木氏は、この史料を琉球に日本の事物を紹介するためのものとしており、琉球にタバコやキセルが存在していたとはしていない（鈴木達也 1999:71）。

ただ喫煙習俗は、17 世紀前半には既に普及していたらしい。1614 ～ 15 年、ウイリアム・アダム

ス（三浦按針）は遭難して寄航した那覇で人々の会話を記録し、『琉球島航海日誌』に記載している。その中に喫煙に関する記述が見られる。

“tabaco foouke［fucfung, to blow］messhore［menshore, polite imperative］”

（ウイリアム・アダムス 1976:65）

「たばこ　ふーけ　めそーれ」とある。この史料から 17 世紀初頭までには那覇に喫煙の習俗が伝来し、普及していたことがわかる。また相手にタバコを勧める表現であることから、既にこのころ客への供応としてタバコが位置付けられていた可能性をも示唆する記述である。

### ②高麗きせる

琉球諸島におけるタバコ、キセルの重要な用途のひとつとして祭祀が挙げられる。祭祀に関わる文献史料は少ないが、道光二十年（1840 年）の『聞得大君加那志様御新下日記』には多くの喫煙具が登場しており、中でもキセルは複数の種類が確認される。抜き出してみると以下のようになる。

御たはこ美きせる（中城王子）

御きせる四對

客きせる八對

高麗きせる三拾

（法政大学沖縄文化研究所 1984:54、102、106、108、111、113）

祭事に関わる品物であるため日用品とはし難いが、当時の喫煙具の記述として注目される。ここではキセルの単位として「対」が用いられている。字面から判断するに雁首と吸口が対となる分離型のキセルを意味していると推察される。[2] また「高麗きせる」は「三拾」とあり、他のキセルと比してずば抜けて多い。相当数が用いられたと推察される。

ペリー来琉関係記事である咸豊三年（1853 年）の『亜船来着并天久寺止宿之亜人唐人等日記』には、九月七日に泊瓧辺りに上陸したアメリカ人が市場で「高麗きせる一」を買って唐銭六文を投げ置いたと記録される（沖縄県沖縄史料編集所 1982:241）。アメリカ人たちは価格を知って購入したわけではなく適当な支払いを行なっていたため、必ずしもこの金額を正当な価とすることはできないが、粗末なキセルであったことが伺える。九月八日の記事には同じく泊市で「高麗きせる」を買い「唐銭七文」を「投置」いている（沖縄県沖縄史料編集所 1982:249）。「高麗きせる」は市内で売買されており、祭祀に用いられたからといって限られた人々だけが購入できる高価なものではないようだ。

「高麗」という言葉が指すのは、朝鮮半島産、ないし朝鮮半島のキセルを模したものと考えるのが自然であろう。しかし琉球王国では、「高麗」という言葉に異なる意味合いがあったことを示す史料がある。『琉球国由来記』では、琉球国王が薩摩から招致した「高麗人」の陶工について触れ、

此故當國陶之器、称高麗焼也。

（伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編纂　1940:133）

琉球王国の焼物を「高麗焼」と呼ぶという。「高麗きせる」が陶製のキセルである可能性を示唆し

ているといえるだろう。裏付けとなる記録として、「高麗きせる」の製作について記した興味深い史料がある。鎌倉芳太郎氏による「陶磁工ノ研究」には、

高麗キセルノ土

名護クシブシナダチ―白土―昔
恩納安富祖　　―白土
〃　仲トマイ　　―赤土（地ンチヤ）

水ヒシテ用フ、

（沖縄県立芸術大学附属研究所　芸術・文化学部門　波照間永吉編 2004:108）

とある。「高麗きせる」の胎土として白土や赤土を用いていたことがわかる。

以上の史資料の検討から、安価に市場で流通していた陶製のキセルということになる。出土した考古資料のうち、パイプ形・無釉陶器製、あるいはパイプ形・施釉陶器製キセルの可能性が最も高いといえる。残念ながら両者のうち何れを指すのかは判然としない。

『英人来着日記』の物品一覧には、さらに「折部形絹多葉粉入弐組」「きせる拾本」「きせる皿五ツ」「黒竹きせる竿三本」といった喫煙具、そして「国分多葉粉壱斤」が見られる（琉球王国表情諸文書編集委員会 1989:272）。「折部形絹多葉粉入」は、同じ史料内で唐人通事の中国への土産として記述されており、また咸豊四年（1854 年）の『亜人成行守衛方え御届申上候写』によればペリー一行へも提供されている（琉球王国評定所文書編集委員会 1991:602 他）。「きせる皿」は雁首を、「きせる竿」は羅宇を指すと推察され、羅宇は「黒竹」とあることから竹製であることが伺える。「国分多葉粉」は良質なブランドとして知られた鹿児島産のタバコである。

### ③今焼きせる

考古資料には多くの陶製キセルが見られる。文献史料においては上述した「高麗きせる」が陶製キセルを指す可能性があることを指摘した。その他の例として、『朝鮮人拾壱人慶良間島漂着馬艦船を以送越候日記』には丑（1733 年）十二月三日に「今焼きせる拾」が提供されている。「今焼」とはおそらく焼物の一種であり、「今焼きせる」とは陶製キセルのことと推察される。「高麗きせる」は 19 世紀の史料ばかりだったが、「今焼きせる」が陶製キセルを指すのなら既に 18 世紀前半には陶製キセルも存在していたことが伺える。

上述の通り、陶製キセルは施釉陶器と無釉陶器の大きく二種類が確認されている。一般に沖縄産施釉陶器は「ジョウヤチ」といい、「上焼」の字をあてる。無釉陶器は「アラヤチ」や「アカヌムー」等に分類され、「荒焼」「赤焼」の字をあてる。しかし何れも「今焼」と呼ばれることはない。『琉球王国評定所文書』にはしばしば「上焼」が登場するが、「荒焼」は見られない。一方で「今焼」は頻出していることから、あるいは無釉陶器の何れかを指す古語であるかもしれないが、今のところはっきりとした根拠はなく即断は避けたい。

### ④鍮鈑きせる

キセルの素材を明示した史料として、『朝鮮人拾壱人慶良間島漂着馬艦船を以送越候日記』には、雍正十一年（1733 年）二月廿三日、漂着した朝鮮人へ「鍮鈑きせる拾ツ　竿共」を提供したことが記されている（琉球王国評定所文書編集委員会 1988:336）。上述した山川原古墓群出土の分離型・金属製キセルと合わせ、18 世紀前半の琉球諸島には既に真鍮製のキセルが存在したことを示唆する史料といえる。また「竿」は羅宇を意味する言葉であろう。「竿共」とあることから、羅宇が別の部品になっている分離型の真鍮製キセルを指すと推察される。またこれは雁首、羅宇、吸口が別個に取り扱われていたことを示唆しているのかもしれない。

同様の記述は 19 世紀にも見られ、道光二十七年（1847 年）の『英人来着日記』に記載された未（1847 年）五月廿一日から八月廿三日までにイギリス人達に提供された物品一覧の中に、「割多葉粉弐巻」「国分多葉粉壱斤」とともに、「鍮鈑大皿きせる壱通」が見られる（琉球王国評定所文書編集委員会 1989:272）。火皿が大型の金属製キセル一式を指していると考えられる。一方で「大皿」とあえて記述していることから、火皿の大きさが異なるキセルが同時期に存在していたことを示唆する史料だといえよう。出土資料を見ると金属製キセルの火皿のサイズは大小認められ、少なくとも 19 世紀半ばにはサイズの違いは認識され区別されていたと推察される。

『英人来着日記』には「壱通」とあることから雁首・羅宇・吸口まで揃ったキセル一式と推察されるが、ほぼ同時期の文献である咸豊五年（1855 年）の『仏人逗留付て之日記』では、フランス人達に提供した物品一覧の中に「鍮鈑調きせるさら壱ツ」とある（琉球王国評定所文書編集委員会 1995:55）。「さら」は火皿、すなわち雁首を指していると推察される。分離型・金属製のキセルは、必ずしも雁首と吸口が対で使用されたわけではないようだ。

### ⑤銀のキセル

咸豊四年（1854 年）の『亜人成行守衛方え御届申上候写』では、アメリカ人へ提供した物品の一覧の中に「銀調きせる一通」が見られる（琉球王国評定所文書編集委員会 1991:584）。字面からすれば銀製のキセルということになろう。今のところ遺跡からの出土例は報告されていない。

道光二十七年（1847 年）の『英人来着日記』には「連烟箇以白斗咀為隹」が見られ、「きせる之事　銀ふかし之事」と註が振られている（琉球王国評定所文書編集委員会 1989:203）。「連」とあることから分離型のキセルで、「白斗」は銀メッキがなされた雁首を意味していると考えられる。「咀為隹」は吸口について記していると推察されるが、鳥の形をした吸口なのだろうか。今のところ出土資料には確認されていない。

### ⑥象牙製キセル

咸豊三年（1853 年）の『亜船来着并天久寺止宿之亜人唐人等日記』では、アメリカ人が泊村の人家に入り込み、「きせるくひ口は象牙調」を強引に抜き取り「唐銭三百七拾九文」を投げ置いた

と記録される（沖縄県沖縄史料編集所 1982:485）。先の「高麗きせる」は唐銭六ないし七文であったことからすれば優に 50 倍以上の価値を与えている。勿論同一の人物が購入したわけではないため単純に何倍とはし難いが、少なくともアメリカ人の目には高級に映ったと推察される。素材からして琉球内部で調達し加工されたとは考えにくく、外部からの輸入品であった可能性を考えなければならない。今のところ出土例、また伝世品などにも象牙の吸口は見当たらないが、たばこと塩の博物館所蔵資料には象牙製の吸口がついた中国のキセルが見られ（たばこと塩の博物館 2008:69 他）、上述のキセルも中国からもたらされた可能性があるといえる。

## 7．考察

以上述べて来た分類を一覧表にまとめる。琉球諸島の諸遺跡から出土するキセル資料は、その特徴から表のように整理・理解されよう（表 2）。

### 年代について

これらの具体的な生産・使用年代については手掛かりに乏しく、判然としない。文献史料のタバコやキセルに関する記述は 17 世紀前半を遡ることはない。一方で上述のキセルのうち、筒形キセルはグスク時代（上原 2003:288、大堀 2010:324）、あるいは 17 世紀以前の遺跡から出土する傾向がある（島 2010:79）と指摘される。しかしキセルは容易に携行できること、多くのグスク遺跡が近世以降も祭祀等の機能を残していること、また祭祀においてしばしば喫煙が行われたと推察されることから、まだ検討の余地を残しているといえよう。管見の限り年代を明確にできる筒形キセル資料は確認されない。

パイプ形・無釉陶器製キセルは多様だが、今のところそれぞれの生産・消費年代を明らかにすることは出来ない。断片的ながら、首里城跡御内原北地区で 17 世紀前半に位置づけられるシーリ遺構（廃棄土坑）からパイプ形 A・無釉陶器製キセルが出土している。（図 3-4）。この資料は胎土に白色粘土が混入するという特徴も有しており、注目される。ただ類例に乏しく、その検討は今後の課題の一つである。またパイプ形・施釉陶器製キセルは、年代を明確にできる資料に恵まれない。

分離型・金属製キセルは、山川原古墓群で 18 世紀前半の銘を持つ厨子甕から出土した資料が確認され、年代の一点を抑えることができる。同時期の金属製キセルの存在は文献史料からも伺うことが出来る。

### 周辺諸地域の喫煙具との関係

表に見る通り、琉球諸島のキセルは形態、素材の面で多岐に渡る。中でも脂反しがなく、筒状の肩部を持つパイプ形・無釉陶器製のキセルが多様である点は一つの特徴として注目される。

江戸近世遺跡からも陶製キセルは出土しており、織部焼キセルや欧米から持ち込まれたクレイパイプが著名である。しかし琉球諸島では何れも出土しておらず、また何れも琉球諸島のパイプ形・陶製キセルとは大きく異なることから、関連性は考えにくい。

| | | |
|---|---|---|
| 筒形・石製<br>瓦質製品片製<br>土製 | | 柱状形<br>釣鐘形 ― 石製<br>瓦質製品片製<br>土製 |
| パイプ形・無釉陶器製 | | パイプ形A ― 無釉陶器製<br>パイプ形B ― 無釉陶器製<br>パイプ形C ― 無釉陶器製<br>パイプ形D ― 無釉陶器製<br>パイプ形E ― 無釉陶器製 |
| パイプ形・施釉陶器製 | | パイプ形 ― 施釉陶器製 |
| パイプ形・金属製 | 分離型 | パイプ形(3) ― 金属製<br>パイプ形(4) ― 金属製<br>パイプ形(5) ― 金属製<br>パイプ形(6) ― 金属製 |
| | 一体型 | パイプ形 ― 金属製 |

表 2　琉球諸島出土キセルの分類

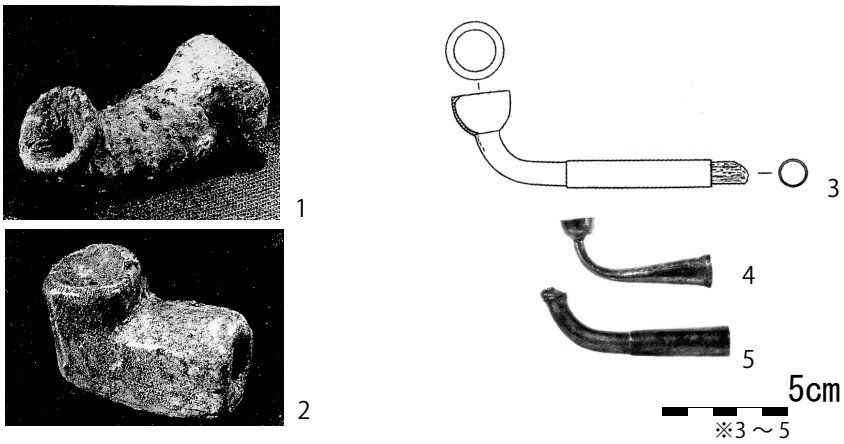



図 10　中国のキセル

中国のキセルとの関連性については不明な点が多い。広西省のチョワン族自治区に位置する合浦上窯窯趾から出土したキセル（広西文物隊 1986:1099-1107）[3] と琉球諸島のパイプ形 A・無釉陶器製キセルの近似性を指摘する意見もある（島 2010:79）が、釉の有無、形状、製作技法といった点で差異が目立ち、両者の関係性は考えにくい。

一方、注目されるのが東南アジアの喫煙具である。既に指摘した（石井 2009a）通り、東南アジアには陶製の喫煙具が広く分布している。その多くは装飾性に富み、型から作られる等琉球諸島のキセルとは大きく異なる。しかしヴェトナム中部の諸遺跡から出土するパイプ形・無釉陶器製の雁首資料は、火皿と肩部が直接接合した形状を呈し、琉球諸島のパイプ形 A・無釉陶器製キセルと類似している。今後同地域の資料を注目しなければならないだろう。

その他のキセルはどうだろうか。中国の喫煙具については研究事例が少なく、まだ比較研究ができる状況にはない。しかし琉球諸島から出土するパイプ形・蝋石製キセル、一部のパイプ形・施釉陶器製キセルは中国産だとする見解が示されている。また文献史料に見られる象牙製キセルは、中国から輸入された可能性を考えなければならない。一方、寛文十二年（1672 年）の『琉球進貢船壱艘ニ積候荷物之覚』には、海賊船に襲撃された中国への進貢船の積み荷の中に「きせる弐百十弐本　代七十四匁弐分　但一本ニ三分五厘」とあり、琉球から中国へ相当数のキセルを持ち込んでいたことが伺える記載がみられる（東恩納 1978:93）。また鹿児島から輸入した高級タバコを中国に輸出していたことも知られている（北村 2007:173-174）。両地域の喫煙を巡る交流は確実に行われていたと考えるべきだろう。

琉球諸島において広く出土するキセルに、分離型・金属製キセルがある。その生産地については不明な点が多い。キセルと同じ青銅製品である簪は琉球諸島で広く普及し、その生産は琉球諸島内で行われていたと考えられる。一方で、銘を有するキセル資料は日本列島から持ち込まれたものばかりである。鹿児島産の高級タバコである国分煙草が近世期の琉球諸島へ輸出されていたことはよく知られており、タバコと共に日本列島からキセルが輸入されていた可能性が考えられよう。銘を見る限り、具体的な産地としては江戸、鹿児島が想定されるが、日本列島全体を対象としたキセルの展開は未だ解明されておらず、不明な点が多い。ただキセル研究はこれまでの都内遺跡の出土資料を中心としたものから、近年では西日本の状況まで広く取り上げた論考も見られるようになった。小濱麻衣子氏によれば、大坂・京・堺出土のキセルは江戸遺跡から出土する資料と同様の変遷でありながら、火皿の形状に一定の独自性が見られるという（小浜 2010:762）。現状では明瞭な地域毎の個性を把握するに至っていないものの、産地の特定に必要となる詳細な比較研究が今後進められていくと期待される。

また近年、中国大陸部、台湾においても資料の蓄積や検討が進んでおり、日本列島、琉球諸島と同様の金属製キセルが生産・使用されていた可能性が指摘されている。北京市西客駅南広場墓葬 M16 から出土したキセルの雁首（図 10-1）、台湾のゼ―ランディア城から出土した分離型・金属製キセルの雁首（図 10-2,3）は、日本列島や琉球諸島で確認される資料と形態の上でよく類似してい

る。今後、琉球諸島から出土する多くの無銘金属製キセルが日本列島以外から持ち込まれた可能性も検討されなければならないだろう。

## ８．小結

琉球諸島のキセルについて、出土資料、文献史料に基づき、形態と素材から分類を試み、網羅的に取り上げた。今後は本稿を踏まえ、同地域のキセルが持つ特異性を改めて認識し、周辺諸地域の喫煙具との比較研究を通じて、アジアにおける喫煙文化の広がりと多様化を検討する手掛かりとしたい。

なお本稿では､出土状況に見るキセルの種類ごとの偏りについては触れなかったが､興味深いデータが得られている。また稿を改めて論じることとする。

※本論文は、平成 21 年度財団法人たばこ総合研究センター研究助成、平成 22 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の交付を受けた調査研究成果の一部である。

**註**

1) キセルの出土点数が少数の遺跡・遺構で、雁首だけ、吸口だけが出土する例はしばしば見られる。こうした事例は都内の遺跡でもよく見られ､その解釈は容易でない｡雁首が一点だけ出土していたからといって雁首だけで喫煙していたとはし難いものの、住屋遺跡の場合は相当数が出土しながら吸口はまるで無いという点で興味深い出土事例だといえる。但し宮古島の他の遺跡からは雁首と吸口とが一緒に出土する例は多々あり、宮古島の特徴というわけではなく住屋遺跡のみの例外的な事例だといえよう。
2) 「高麗」キセルに「対」といった組み合わせを暗示する単位を付けた用例は今のところ見当らない。
3) 断片的ながら提示された遺跡・遺構の状態、出土状況からして、合浦上窯窯址から出土した 3 点のキセルの生産年代は、窯自体の操業年代とともに不明とせざるを得ない。一方、中国で最も早い喫煙の証拠とされ、タバコ伝来年代の問題とばかりからめて取り沙汰されているが、これらキセル資料は発掘報告の事例がほとんどない庶民の喫煙具だと推察されることから、喫煙習慣の展開を考える上で貴重な点を含んでいる。今後の資料蓄積に期待したい。

**引用・参考文献**

**論文**

石井龍太　2009a「 ミャンマーの陶製パイプー東アジア･東南アジアの喫煙具 ―」『東南アジア考古学会紀要』29:71-78, 東南アジア考古学会

石井龍太　2009b「 琉球の喫煙文化 」『南島研究』50：6-23, 南島研究会

上原静　2003「第 4 章 グスク時代　第三節 社会と文化」『沖縄県史 各論編 第二巻　考古』: 253-328

ウィリアム・アダムス　1976「琉球諸島航海日誌　一六一四－一六一五」比嘉洋子訳『南島史学』9

大堀皓平　2010「第 16 節　煙管」『首里城跡 御内原北地区発掘調査報告書 I 』沖縄県立埋蔵文化財センター編 , 324-329

沖縄県沖縄史料編集所　1982『沖縄県史料　前近代 2　ペリー来航関係記録 1』沖縄県教育委員会

沖縄県立芸術大学附属研究所　芸術・文化学部門　波照間永吉編　2004『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）第一巻』

北村正光（発行）　2007『明治後期産業発達史資料　第 785 巻　薩隅煙草録（下）・北海道輸出木材之調査』株式会社龍溪書舎
古泉弘　1983『江戸を掘るー近世都市考古学への招待ー』柏書房
小濱麻衣子　2010「近世のキセルに関する考古学的検討」『先史学・考古学論究Ⅴ　下巻　甲元眞之先生退任記念』龍田考古会 , 755-766
島弘　2010「沖縄諸島出土の煙管について」たばこと塩の博物館 江戸遺跡研究会編『シンポジウム IOC と日蘭交流　—IOC 遺跡の調査と嗜好品 —』,78-89
島袋洋　1990「(22) キセル」『阿波根古島遺跡（ー那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告ー)』沖縄県教育庁文化課 , 111-115
鈴木達也　1999『喫煙伝来史の研究』思文閣出版
たばこと塩の博物館　2008『水煙具・東アジアの喫煙具・シガー＆シガレットホルダー』
長佐古真也　2010「EDX 分析による金属製喫煙具の合金組成　— キセルの祖形を求めて —」たばこと塩の博物館 江戸遺跡研究会編『シンポジウム IOC と日蘭交流　—IOC 遺跡の調査と嗜好品 —』,137-153
野口勝一 編集　1896[1975]『沖縄風俗圖繪』観光展望社
東恩納寛惇　1978『東恩納寛惇全集 2』琉球新報社
法政大学沖縄文化研究所　1984『聞得大君加那志様御新下日記』沖縄研究資料 4
琉球王国評定所文書編集委員会　1988『琉球王国評定所文書　第一巻』浦添市教育委員会
琉球王国評定所文書編集委員会　1989『琉球王国評定所文書　第三巻』浦添市教育委員会
琉球王国評定所文書編集委員会　1991『琉球王国評定所文書　第七巻』浦添市教育委員会
琉球王国評定所文書編集委員会　1995『琉球王国評定所文書　第十一巻』浦添市教育委員会
伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編纂　1940『琉球史料叢書　第一』名取書店
良定、横山重　1936『琉球神道記：弁蓮社袋中集』大岡山書店

広西文物隊　1986「広西合浦上窯窯趾発掘簡報」『考古』一九八六（十二）：1099-1107
北京市文物研究所　2009「丰台西客駅南広場墓葬発掘簡報」『北京文博』2009（2）：41-48

**報告書**

浦添市教育委員会　1985『浦添城跡発掘調査報告書』
浦添市教育委員会　1990『城間古墓群』
砂川元島遺跡調査団　1975『沖縄・宮古島　砂川元島遺跡発掘調査概報』
沖縄県教育委員会文化課　1997『西表島慶来慶田城遺跡　重要遺跡確認調査報告』
沖縄県教育委員会文化課　1999『湧田古窯跡 (Ⅳ)　ー県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査ー』
沖縄県教育庁文化課　1987『古我地原内古墓　ー沖縄自動車道（石川 - 那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（7）ー』
沖縄県教育庁文化課　1988『首里城跡　歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査』緑林堂出版
沖縄県教育庁文化課　1990『阿波根古島遺跡（ー那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告ー)』
沖縄県教育庁文化課　1992『安仁屋トゥンヤマ遺跡　ー下級下士官隊舎建設に伴う緊急発掘調査報告ー』
沖縄県教育庁文化課　1993『湧田古窯跡 (Ⅰ)　ー県庁舎行政棟建設に係る発掘調査ー』沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001a『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001b『首里城跡　管理用道路地区発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001c『首里城跡　下之御庭跡・用持座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2002a『天界寺跡 (Ⅱ)　首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2002b『新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡』

沖縄県立埋蔵文化財センター　2003a『綾門大道跡　－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2003b『尻並遺跡　那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2004a『首里城跡　東のアザナ地区発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2004b『嘉田地区古墓群　嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2004c『首里城跡　城郭南側下地区発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2005a『首里城跡　上の毛及び周辺地区発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2005b『首里城跡　書院・鎖之間地区発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2005c『ナカンダカリヤマの古墓群　急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2006a『首里城跡　御内原地区発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2006b『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅱ）　埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）報告』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2007a『渡地村跡　臨港道路那覇 1 号線整備に伴う緊急発掘調査報告』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2007b『与那国島　潮原古墓群』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2007c『首里城跡　御内原西地区発掘調査報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2010『首里城跡　御内原北地区発掘調査報告書』
宜野湾市教育委員会　2008『嘉数トゥンヤマ遺跡Ⅰ　範囲確認調査報告書』
北谷町教育委員会　2001『山川原古墓群（2）　瑞慶覧（11）倉庫建設工事に係る文化財発掘調査報告』
今帰仁村教育委員会　1986『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』
今帰仁村教育委員会　1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』
那覇市教育委員会　1991『御細工所跡　－城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』
那覇市教育委員会　1992『壺屋古窯群Ⅰ』
那覇市教育委員会　1996『那崎原遺跡　－那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告－』
那覇市教育委員会　2000『ナーチュー毛古墓群　那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書』
那覇市教育委員会　2001『識名原遺跡』
那覇市教育委員会　2005『銘刈古墓群（Ⅵ）　－天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅵ－』
平良市教育委員会・社会教育課　1999『住屋遺跡　平良市庁舎建設に伴う記録保存の為の緊急発掘調査』

**図の出典**

表 1,2　筆者作成

図 1　1、筆者作成　2、古泉 1983：118-121

図 2　1、沖縄県教育庁文化課 1987:152　2、今帰仁村教育委員会 1986:41　3、沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c：157　4、沖縄県教育庁文化課 1987：72　5、沖縄県教育庁文化課 1987：152

図 3　1、沖縄県立埋蔵文化財センター 2002：119　2、沖縄県立埋蔵文化財センター 2007a：187　3、那覇市教育委員会 2000：162　4、沖縄県立埋蔵文化財センター 2010:328　5、筆者撮影・作成（湧田古窯跡行政棟地区出土　沖縄県立埋蔵文化財センター収蔵）　6、沖縄県教育委員会文化課 1999：81　7、沖縄県立埋蔵文化財センター 2010:328　8,9、筆者撮影、作成（湧田古窯跡地下駐車場地区出土　沖縄県立埋蔵文化財センター収蔵）　10、沖縄県教育委員会文化課 1999：81　11、沖縄県立埋蔵文化財センター 2007a：187

図 4　1,2,6、沖縄県立埋蔵文化財センター 2006a：135　3,4、沖縄県教育委員会文化課 1999：81　5、那覇市教育委員会 1992：152　7、沖縄県立埋蔵文化財センター 2004c：103　8,9、沖縄県埋蔵文化財センター 2001b：194　10、沖縄県教育庁文化課 1993：165　11、沖縄県立埋蔵文化財センター 2006a：110　12、沖縄県立埋蔵文化財センター 2007：104　13、沖縄県教育委員会文化課 1999：81　14、沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a：175

図 5　1、那覇市教育委員会 2000：163　2、北谷町教育委員会 2001：168　3、沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a：175　4、沖縄県立埋蔵文化財センター 2004c：103　5、沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c：157　6、沖縄県教育委員会文化課 1999：81　7、沖縄県教育庁文化課 1987：156

図 6　1、沖縄県教育庁文化課 1987：156　2、沖縄県立埋蔵文化財センター 2006a：135　3、沖縄県立埋蔵文化財センター 2006b：47　4、沖縄県教育庁文化課 1988：92　5、筆者撮影・作成（ナーチュー毛古墓群出土　那覇市教育委員会収蔵）

図 7　1、砂川元島遺跡調査団 1975：14　2,5、平良市教育委員会・社会教育課 1999：190　3、平良市教育委員会・社会教育課 1999：192　4、平良市教育委員会・社会教育課 1999：191　6,8,10、沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b：147　7、平良市教育委員会・社会教育課 1999：191　9、11、平良市教育委員会・社会教育課 1999：193　12,13、沖縄県立埋蔵文化財センター 2003b：84　14,16、平良市教育委員会・社会教育課 1999：196　15、平良市教育委員会・社会教育課 1999：195　17、筆者撮影・作成（砂川元島遺跡出土　宮古島市教育委員会収蔵）

図 8　1、平良市教育委員会・社会教育課 1999：191　2,7,10、浦添市教育委員会 1985：143　3、今帰仁村教育委員会 1991：268　4、沖縄県立埋蔵文化財センター 2005b:62　5,6、沖縄県立埋蔵文化財センター 2006a：117　8、沖縄県立埋蔵文化財センター 2004a：154　9、平良市教育委員会・社会教育課 1999：190

図 9　1、沖縄県教育庁文化課 1988：101　2,3、筆者撮影・作成（野底遺跡　石垣市教育委員会収蔵）　4,7,9、筆者撮影・作成（野底遺跡出土　石垣市教育委員会収蔵）　5、筆者作成（黒石川窯址出土　石垣市教育委員会収蔵）　6,8,11,12,15,16、沖縄県立埋蔵文化財センター 2004b：93　10、筆者撮影・作成（嘉田地区古墓群出土　沖縄県教育委員間収蔵）　13,14、沖縄県立埋蔵文化財センター 2007b：49

図 10　1,2、広西文物隊 1986：1101　3、北京市文物研究所 2009：44　4,5、長佐古 2010：142

# A Basic Study of Smoking pipes excavated in Ryukyu Islands

ISHI Ryota

Smoking is one of the most important cultures in the world history. In order to clarify the smoking culture, it is necessary to study the Smoking tools. Pipes are popular smoking tools and by studying the pipe, we can know how the culture of smoking had been altered.

From the sites in the Ryukyu Islands, we can excavate a number of unique "*Kiseru*", East Asian Smoking Pipes. Kiseru in Ryukyu Islands are classified two types: cylindrical shape and pipe shape. Cylindrical shape Kiseru is made to cut the stone and pottery. Pipe shape Kiseru is a ceramic and a metal product.

In the future, in order to study the spread and diversification of smoking culture in Asia, we need comparative studies of smoking tools and pipes in various regions around the singular and the Ryukyu Islands. We find many pottery pipes in Southeast Asia and China, but there are many differences between them and Kiseru in Ryukyu Islands in shape. The metal pipes were distributed in Japanese Archipelago, and they had been exported to the Ryukyu Islands.